

「槿」の和と漢

賀川歩美

一、序

現代では訓読みで「ムクゲ」と読まれる「槿」の字だが、以前は別の花の名で読まれていた。

『類聚名義抄』を見ると、「槿」という字には「アサガホ」の読みが挙げられており、かつては「槿」の字に「アサガホ」という読みを当てていたことが分かる。ただし、「アサガホ」は蔓性の一年草、つまり草花であるのに対して、「ムクゲ」は落葉低木である。

今回は、何故「槿」という字と「アサガホ」が結び付けら

れたのかについて考察する。

二、漢詩での「槿」

先に、漢詩での「槿」の詠まれたかたについて検討する。

中国の詩では、「乍可為天上牽牛織女星、不願為庭前紅槿枝」。(乍ち天上に牽牛織女の星を為すべし、庭前に紅槿の枝を為すを願はず。)(『全唐詩』卷四二二、元稹、古決絶詩⁽¹⁾)、
 「薤葉有朝露、槿枝無宿花」。(薤葉に朝露有り、槿枝に宿花無し。)(『白氏文集』卷九、勸酒寄元九、〇七一九⁽²⁾)など、

「槿枝」という語があることから、木として「槿」が詠まれ

ていることが分かる。この木は「ムクゲ」を指していると思われ、「ムクゲ」は生垣や庭木などに用いられた。⁽⁴⁾

『礼記』月令には「仲夏之月、……木榿栄。⁽⁵⁾（仲夏の月、……木榿栄く。）」とあるほか、『芸文類聚』が引く隋の江総の「南越木榿賦」に以下のように記載がある。

東方記乎夕死。郭璞贊以朝栄。潘文體其夏盛。替賦憫其秋零。（隋江総の南越の木榿賦に曰はく、……東方記に夕べに死す。郭璞の贊以て朝に栄く。潘の文體に其れ夏に盛んなり。替の賦に其の秋に零つを憫む。）

「榿（木榿）」は朝に花咲き、夕べにしほむ。また夏に花を咲かせ、秋になると花が落ちる性質の花であるという。

『詩経』鄭風、有女同車には「有女同車。顔如舜華。⁽⁷⁾（女有りて車を同じくす。顔は舜の華のごとし。）」とある。『毛傳』には「舜木榿也。（舜は木榿なり。）」と注釈が加えられていることから、ここで詠まれる「舜」は、「木榿（榿）」と同じものと考えてよい。⁽⁸⁾ この詩では「舜」の花は女性の美しい容貌に喩えられている。

『文選』には、「榿」または「舜（舜）」の用例が三首ある。野径既盤紆、荒阡亦交互。榿籬疎復密、荆扉新且故。

（野の径は既に盤紆たり、荒れたる阡も亦た交互せり。

榿籬は疎に復た密かに、荆扉は新たに且つ故し。）

（卷二十二、沈約、宿東園（東園に宿す））

この沈約の詩では、「榿」の木で作った生け垣がまばらに、あるいは茂つたりしながら列なる様子が詠まれている。自らの家園の情景である。

激澗代汲井、挿榿当列墉。

（澗を激いで汲井に代へ、榿を挿めて列墉に当てぬ。）
（卷三十、謝靈運、田南樹園激流植榿（田南に園を樹てて流れを激ぎ援を殖う））

謝靈運の詩も同様に、田居の南に作った園の様子を詠んだものである。谷川の水を引き上げて汲み井戸の代わりとし、榿の木を植えて生け垣としたと、「榿」は景物として詠まれている。

晦朔如循環、月盈已復魄。……舜栄不終朝、蜉蝣豈見夕。
（晦朔は循環の如く、月は盈ちて已に復た魄し。……舜栄は朝を終へず、蜉蝣豈に夕べを見んや。）

（卷二十一、郭璞、遊仙詩七首、其七）

（李善註）潘岳朝菌賦序曰、朝菌者、時人以為舜華。莊生以為、朝菌、其物向晨而結絶日而殞。毛萇詩伝曰、蜉蝣朝生夕死。

(潘岳の朝菌賦の序に曰はく、朝菌は、時の人以為らく
薜華なり。莊生以為らく、朝菌、其物晨に向かひて結び
日絶へて殞つ。毛萇詩伝に曰はく、蜉蝣は朝生じて夕に
死す。)

この郭璞の遊仙詩は、「薜」を「朝生じて夕に死す」とい
う蜉蝣と対にして、共に夕べに落ちる、あるいは死ぬという
儂いものとして詠んでいる。満ちては欠ける月などとともに、
時の移ろいやすさ、ひいては人生の儂さを詠むのである。

唐代になると、朝に咲いて夕べにしほむ、短命の花である
という性質から、長寿で秋冬になつても常緑を保つという
「松」との対比がより盛んに取り上げられたという。また、
松以外の長寿の木と対にするものも見られる。

願作貞松千歲古、誰論芳樅一朝新。

(願はくは貞松と作りて千歳に古からむ、誰か論ぜむ芳樅
の一朝に新たなるを。)

〔全唐詩〕卷八八五、劉希夷、公子行

「公子行」は、劉希夷によつて始められた楽府題で、洛陽
の貴公子たちの遊びぶりを詠んだものである。娼家の美女と
公子がかわす言葉の中で、常緑の松のような長い愛情を願ひ、
「樅」のような一朝だけの儂い愛を厭うのである。

君子芳桂性、春榮冬更繁。小人樅花心、朝在夕不存。
(君子芳桂の性、春に榮え冬更に繁し、小人樅花の心、
朝に在るも夕べには存せず。)

〔全唐詩〕卷三七三、孟郊、審交

孟郊の詩も同様に、一年中、冬になつても香りを保つ
「桂」と、朝に咲き夕べには花を散らす「樅」を対にし、
「桂」を君子の性に、「樅」を小人の心に喩えている。

以下に挙げるように、白詩にもこうした「樅」と長寿の木
との取り合わせを見ることができ。

松樹千年朽、樅花一日歇。

(松樹は千年にして朽ち、樅花は一日にして歇む。)

〔白氏文集〕卷五、王山人に贈る、〇二〇五

椿寿八千春、樅花不経宿。

(椿寿は八千春、樅花は宿を経ず。)

〔白氏文集〕卷七、齊物二首 其二、〇三三三

「松」や「椿」といった長寿の木に対応させる形で「樅」
を詠み、「樅」を一日の、儂いものとして詠んでいる。また、
以下に挙げる白詩の句は『和漢朗詠集』(秋、樅、二九一)
にも取り上げられている。

松樹千年終是朽、樅花一日自為榮。

〔松樹〕千年終に是れ朽ちぬ、榿花一日自ら榮を為す。

〔白氏文集〕 卷十五、放言五首 其五、〇八九二

松の木は千年の樹齡があつても終には朽ち果て、榿の花は一日の壽命しかないが自ずから花を咲かせるである。と、
 「松」と「榿」を対句にし、長寿の松に対して、榿を一日の花、短命で儂いものとして詠むものである。

以下のような表現を取り入れたものか、日本漢詩にも、
 「松」と「榿」の対比は取り入れられている。

松樹従来蔑雪霜、寒風扇処独蒼蒼。奈何桑葉先零落、不
 屑榿花暫有昌。

〔松樹〕は従来雪霜を蔑ないがしろにす、寒風扇ぐ処独り蒼蒼。桑葉の先だちて零落することを奈何せむ、榿花の暫らく昌さかゆること有るを屑ものかすとせず。

〔新撰萬葉集〕、冬、一八八¹¹⁾

「松樹」を霜雪にあつてもしほまないものであるとし、「桑葉」や「榿花」をそれに対して零落するもの、短命のものとして詠んでいる。

こうした詠みかたは、「榿」を、短命のもの、はかないものとして詠んだ詠みかたであるといえる。特に、『白氏文集』八九二番の句は、「榿花一日の榮」という、人の世の榮

華が儂いことのとえとして用いられることわざにもなっている。

三、和歌での「アサガホ」

次に、和歌での「アサガホ」の読まれかたについて考察する。上代では、『万葉集』に、「アサガホ」を詠む和歌が五首ある。

芽之花 乎花葛花 瞿麦花 姫部志 又藤袴 朝貌之花
 (はぎのはな おはな げすばな なでしこのはな をみなへし またふぢばかま あさがほのはな)

(卷八、秋雑歌、秋の野草を詠む歌、山上憶良、一五四¹²⁾)

ここでは、「アサガホ」を秋の野草として他の草花の名と共にあげて詠んでいる。

朝杲 朝露負 咲雖云 夕陰社 咲益家礼
 (あさがほはあさつゆおひてさくといへどゆふかげにこそささまざりけれ)

(卷十、秋雑歌、二一〇八)

二一〇八番歌では、「あさつゆおひてさく」と言われている、と朝に咲く花であると認識されており、「ゆふかげにこ

そさきまさりけれ」と、夕にも散らずに咲いている姿を詠んでいる。

展転 恋者死友 灼然 色庭不出 朝容貌之花

(こいまろびこひはしぬともいちしろくいろにはいでじ

あさがほのはな)

(巻十、秋相聞、二二七八)

言出而 云者忌染 朝貌乃 穂庭開不出 恋為鴨

(ことにいでいはばゆゆしみあさがほのほにはさまで

ぬこひをするかも)

(巻十、秋相聞、二二七九)

和我目豆麻 比等波左久礼杼 安佐我保能 等思佐倍己

其登 和波佐可流我倍

(わがめづまひとはさくれとあさがほのとしさへこと

わはさかるがへ)

(巻十四、相聞、三五二三)

二二七八番、二二七九番、三五二三番歌はいずれも相聞歌であり、最後に挙げた三五二三番歌の「アサガホ」は意図するところが不詳だが、先の二首は「アサガホ」の花が人目に立つように咲くことから、恋心が表に現れることを「色に出づ」「ほに咲き出づ」などと詠むものである。

また、用字は「朝貌」(一五四二、二二七九)、「朝容貌」

(二二七八)、「朝景」(二二〇八)、「安佐我保」(三五二三)

となっており、この段階では「槿」の字との結びつきは強くなかったものと思われる。

平安期に入ると、「アサガホ」の詠みかたには、二通りのものが見られるようになる。この二通りの詠みかたは、その両方を『大和物語』に見ることができる。

男、はじめごろよんだりける

いかにしてわれは消えなむ白露のかへりてのちはも

のや思はじ

返し、

垣なる君が朝顔見てしかなかへりてのちはものや

思ふと

(八十九、網代の氷魚¹⁴)

どうかして私は白露のように消えてなくなってしまう。そうしたら家に帰ってのち、恋になやむこともないでしょう、という男の歌に対して、女が朝のあなたの顔を拝見したいものです、と返している。ここでの「アサガホ」は、「かきほなる(垣根に咲いている)朝顔の花と、男の「朝の顔」の意をかけて詠んでいる。

また、別の章段には以下のようにある。

伊勢の守もろみちのむすめを、ただあきらの中將の君に
あはせたりける時に、そこなりけるうなをを、右京の大
夫よびいでて、語らひて、朝よみておこさせたりける。

おく露のほども待たぬあさがほは見ずぞなかなか
あるべかりける

(三十九、朝顔の露)

契りを結んで、あくる朝に贈った和歌として、露のおくわ
ずかな間をも待たずにしぼんでしまう朝顔は、かえって、見
ないでおけばよかったと思います、と別れのつらさを詠んで
いる。この「アサガホ」は、僅かに見たばかりで別れてしま
った、女の朝の顔であると同時に、「露のおくわずかな間も
待たずにしぼんでしまう」はかないものであった。

このような例では、「アサガホ」はすぐにしぼんでしま
う、はかないものとして詠まれている。

「アサガホ」に対して、「あさがほ(朝の顔)」という和名
から「人の朝の顔」と重ねて詠むという詠みかたと、夕べに
はしぼんでしまうという性質から、はかない花であると詠む
詠みかたの二つの詠みかたが見られるのである。

「人の朝の顔」として詠む例を、以下に挙げる。

人のくさあはせしけるにあさがほかがみぐさなどあ
はせけるに、かがみぐさ勝ちにければよめる
まげがたのはづかしげなるあさがほをかがみぐさにもみ
せてけらまし

(『後拾遺和歌集』卷二十、雑六、一二一四)

しどけなきねくたれがみを見せじとやはたかくれたるけ
さの朝顔

(『小町集』九十七)

「かがみぐさ」(鏡)と取り合わせたり、「しどけなきねくた
れがみの」(寝乱れた髪の毛)とあることから、「アサガホ」を
「朝の寝起きの顔」として用いていることが分かるのである。

同様に、「槿」をはかないものとして詠む例を以下に挙げる。
むかし、男、色好みなりける女にあへりけり。うしろめ
たくや思ひけむ、

われならで下紐解くなあさがほの夕影またぬ花には
ありとも

返し、

ふたりして結びし紐をひとりしてあひ見るまでは解
かじとぞ思ふ

(『伊勢物語』、三十七、下紐)

「色好みなる女」の心の移り変わりを、「アサガホ」の「夕影またぬ花」であるという性質に喩えて詠んでいる。「あさがほ」の花の咲く時間の短さを、愛情の長続きしないことに喩えて詠むことは、先に挙げた劉夷希の「公子行」にも似ている。

よのなかをなにしたとへん夕霧もまたできえぬるあさが
ほの花

〔順集〕一二〇

これは、「世の中を何にたとえん」から始まる和歌の連作の中の一首である。世の中を、夕べを待たずに消える朝顔に喩えて、無常の世を詠んでいるのである。

女院にてあさがほを見給ひて

あすしらぬ露のよにふる人にだに猶はかなしとみゆる朝
がほ

〔公任集〕三五八

露のようにほかないこの世に過ぐす人にとってさえも、朝顔はほかない花であると見える」と、人の世と取り合わせながら、朝顔の花の儂さを詠んだ和歌である。

なお、『和漢朗詠集』では、「槿」の朗詠題に、「アサガホ」を詠んだ和歌が治められている。

おほつかなたれとかしらむあさぎりのたえまにみゆるあ
さがほのはな

（詠み人知らず、二九三）

この二九三番歌では、「たれとかしらむ」（誰であるか分らない）と、「アサガホ」に朝の人の顔の意を利かせて詠んでいる。

あさがほをなにはかなしとおもひけむひとをも花はいか
がみるらむ

（藤原道信、二九四）

一方で、二九四番では、「朝顔の花を、どうしてほかないなどと思ったのだろうか、人のことだつて花はほかないものと見ることだろう」と人の命のはかなさと同等のものであると朝して顔のはかなさを詠んでいる。

『和漢朗詠集』に挙げられた二首の「アサガホ」の和歌も、「朝の（人の）顔」「寝起きの顔」として詠む詠みかたと、「ほかないもの」として詠む詠みかたの二種類の詠みかたをしているのである。

四、まとめ

漢詩での「槿」は、一日でしほむはかないものとして盛んに詠まれた。和歌での「アサガホ」には二種類の詠みかたがある。一方ではその名から「人の朝の顔」と重ねて詠まれ、もう一方では、夕べにはしほんでしまうという性質から、はかなさの象徴として詠まれた。

夕べにしほむ、という性質、そしてそれから連想される「はかない命である」という詠みかたは、漢詩での「槿」の詠まれかたと共通している。この「はかない」花であるという共通点から、「槿」の字と「あさがほ」は結び付けられていったものと思われる。

注

- (1) 以下、『全唐詩』の訓読は筆者による。
 (2) 漢代の葬送歌「薤露歌」に「薤上の露、何ぞ啼きやすき露啼き明朝更に又た落つ、人死して一たび去れば何れの時か帰らむ。」とあることから、「薤露」は消えやすきものとされ、人生の儚さに喩えて詠まれた。ここではその薤露と槿花を対にし、槿を儚いものとして詠んでいる。『和漢朗詠集』二九二番

の兼明親王の願文からの摘句にも、「来而不留、薤露有弘晨之露。去而不返、槿籬無投暮之花。(来たりて留らず、薤露に晨を払ふ露有り。去りて返らず、槿籬に暮に投る花無し。)」とあり、この白詩の表現に近い。

(3) 以下、『白氏文集』は本文、訓読ともに新釈漢文大系『白氏文集』による。

(4) ただし『全唐詩』巻五十二、宋之間、魯忠王挽詩に「人悲槐里月、馬踏權原霜(人は悲しむ槐里の月、馬は踏む權原の霜。)」とあり、馬が踏むというので、草花にも「槿」として詠まれるものがあつたのではないかと思われる。

(5) 「礼記」は本文、訓読ともに新釈漢文大系「礼記」(明治書院)によつた。

(6) 「芸文類聚」の訓読は筆者による。

(7) 「詩経」は本文、訓読ともに漢文大系「毛詩」(富山房)を参照した。

(8) なお、室町時代に清原宣賢が人に書写させ、自ら清原家の累代相伝の点を加えた、『詩経』の注釈書、静嘉堂本『毛詩鄭箋』では、「舜」の字に「あさがほ」という訓みが付されている。この訓は平安後期ごろまで遡ることができ、その頃には「舜(葬)」を「あさがほ」と読むことが定着していたとみられる。

(9) 以下、『文選』は本文、訓読ともに全釈漢文大系『文選』(集英社)による。ただし、註は正中書局『文選』を参照した。
 (10) 半澤幹一・津田潔『対釈新撰万葉集』(勉誠出版、二〇一五、冬、九十四番注釈。

(11) 『新撰萬葉集』は本文、訓読ともに『対釈新撰万葉集』による。ただし、歌番号は『新編国歌大観』によつた。

(12) ただし『万葉集』に詠まれる「あさがほ」は現代の「朝顔」ではなく、桔梗であるとする説が一般的である。現代の「朝顔」は中国原産の植物で、九世紀初め頃に薬用目的で渡来したとされる。(木下武司『万葉植物文化誌』(八坂書房、二〇一〇年))

(13) 以下、和歌は『新編国歌大観』によった。

(14) 以下、『大和物語』および『伊勢物語』は新編日本古典文学全集『竹取物語・伊勢物語・大和物語・平中物語』(小学館)によった。

(かがわ・あゆみ 成城大学大学院博士課程前期)